

二〇二五年一〇月二五日

里山の裾野に仰ぐ柿花火  
庭紅葉手延べ硝子に透けにけり  
里山路垣根のごとく芒原  
東雲に薄紅の鰯雲

康子

もとこ

きよえ

えいじ

二〇二五年一〇月二四日

留守宅に秋風とほす一日かな  
湖の藍深き淵冬近し  
旅に打つ弁慶の鐘秋澄めり  
大玻璃に涙ばしりす秋時雨  
一掬の五銖水に秋惜しみけり

あひる

澄子

なつき

むべ

なつき

二〇二五年一〇月二三日

常濡れの弘法石や苔の花  
のけぞりて離陸機仰ぐ天高し  
山を去る冠雪の富士振り向きつ

なつき

千鶴

澄子

二〇二五年一〇月二二日

秋晴に心の弾む庭仕事  
百寿なる恩師囲みて菊の宴  
地獄谷埧塙のごとく紅葉燃ゆ  
零余子飯炊き亡き父の忌を修す

明日香

かかし

康子

明日香

二〇二五年一〇月二一日

秋日落つ水平線に巨船影  
色褪せしがり版句集秋燈下  
蔦紅葉絡むチャペルの彩窓に  
高梯子上り獅子舞ふ秋祭  
爽やかや車窓に須磨の浦展け

なつき

かかし

むべ

やよい

なつき

二〇二五年一〇月二〇日

喬木の森を切り裂き鵬高音  
朝霧をまとひて浮かぶ大比叡

むべ

もとこ

二〇二五年一〇月一九日

綾なして揺らぐ水草紅葉かな

明日香

毎日句会みのる選・二〇二五年一〇月二七日